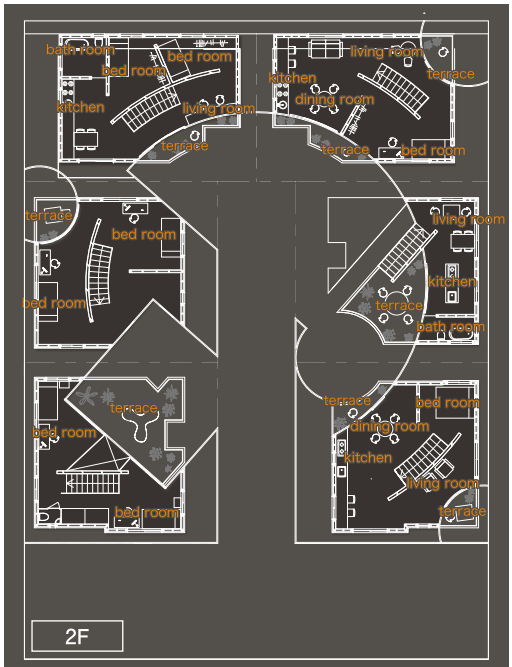
学生部門

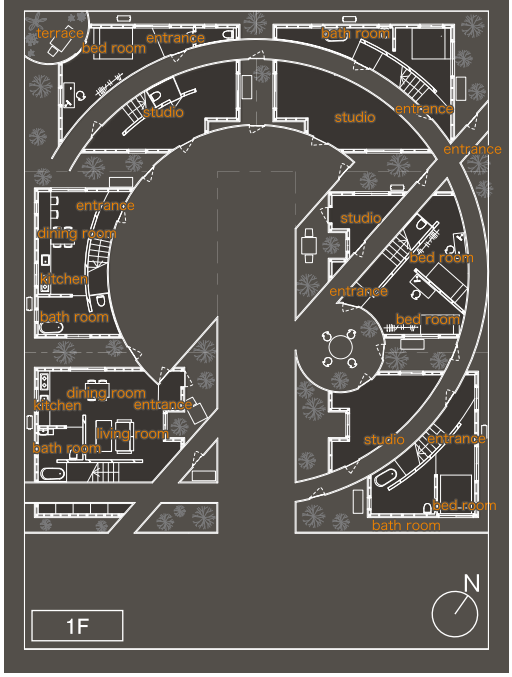
住作

石田 弘樹・一柳 亮太郎・岩崎 正人

日本大学

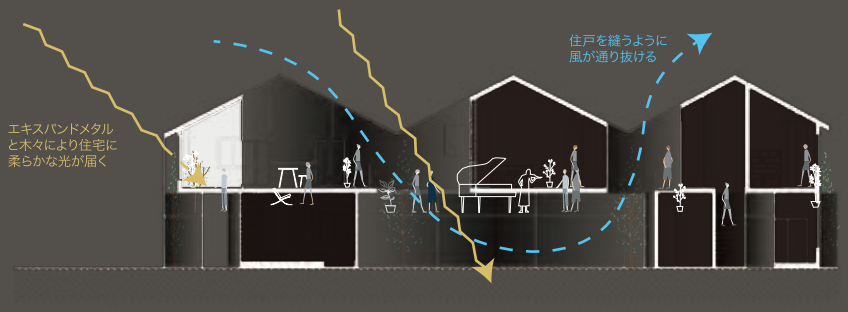
【作品名】volume//void（ヴォリューム／ヴォイド）～位置指定道路を介して繋がる住宅群～





■SECTION　～豊かな屋外空間による良好な住環境～

住宅が削り取られることによって、豊かな屋外空間が断面的にも生み出される。屋外空間が連担することで、密集する住宅群の通風と採光を確保し、開放的な暮らしを提供する。

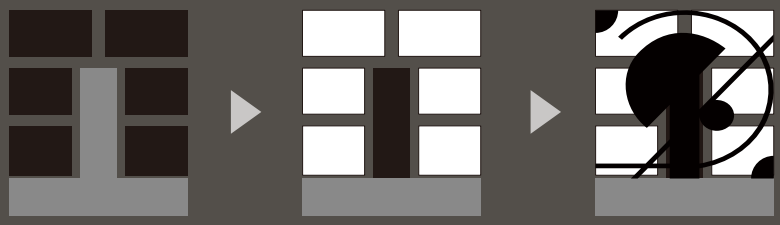


■CONCEPT　～住宅群の『残余空間（＝void）』を設計する～

01.『敷地』-『内部空間』=『残余空間（外部）』
日本の都市には余白が多い。人の通れない隙間や、使われていない公開空地などがその例である。これは建物が占有しない外部空間が内部空間の『残余空間』という意識の表れである。

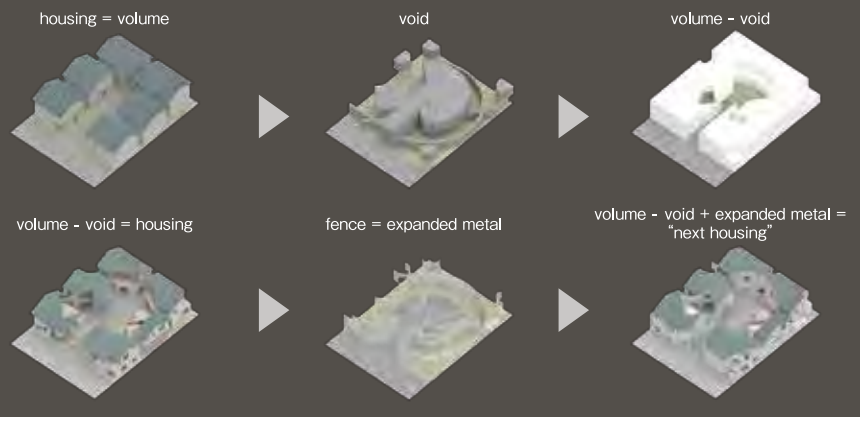
02.位置指定道路というヴォイド/見えないヴォリューム
住宅に取り囲まれる位置指定道路は各住宅が所有する共通の資産であり、この『残余空間（外部）』の有効性について検討。『残余空間』は不可侵なヴォイドまたは見えないヴォリュームである。

03.『残余空間』の設計
位置指定道路という不可侵なヴォイドを、ヴォリュームとして見立て、そこから各住戸に連続していくよう『残余空間（外部）』を設計。



■DIAGRAM　～volume/voidの反転と「塀」の再解釈～

建築を『残余空間（外部）』から設計する。位置指定道路という不可侵なヴォイドを建築的な操作によって設計することで、屋外空間が建築的な豊かさを獲得する。幾何学のヴォイドは、屋内外の反転を明快に示し、各住戸を連担する。



設計コンセプト

日本全国各地に無数に点在する位置指定道路（42条1項5号道路）に着目した住宅群の提案。コロナウイルスによって自宅で過ごす時間が増えたことにより、多くの人が屋外空間の重要性に気づき始めた。今後、住宅設計においてどのように開放的で豊かな屋外空間を取り込むかが重要になるだろう。また、自宅で過ごす時間が増えたからこそ、周辺住民とのコミュニケーションも重要になる。

本提案は、住宅と住宅、または家族と家族が築く「連帯感」をポストコロナ時代を見据え共通の資産である『道』を介して拡張していく、新たなコミュニティの在り方と豊かな屋外空間を持った住宅群の提案である。

位置指定道路を含めた住宅群の隙間を『残余空間（void）』と捉え、建築的な操作を行うことで豊かな屋外空間を獲得する。道路などの外部空間の形態と、住宅の内部空間の形態の双方が、建築的な豊かさを持ちうるように、内部／外部、ヴォリューム／ヴォイド、図／地が拮抗し反転し合うことで、住宅群に連担する屋外空間をもたらす。

さらに、近隣住民同士の関係や内部／外部の繋がりを遮っていると考えられる「塀」を再解釈する。各住戸を連担するように塀を立ち上げることで、住宅群に一体感を与える。また、再解釈された塀にはエキスパンドメタルを用いることで通風と採光を確保し、良好な住環境を担保する。

審査委員講評

少子高齢化の進む現代社会において、非常に説得力のある計画です。日本のあらゆるところに存在する位置指定道路と住宅の区画の本来のあり方を熟慮し、コミュニティの場へと改変させています。小さな子どもたちとお年寄りを含めた真に「向こう三軒両隣」的な楽しさが伝わって来ます。ゆるくカーブさせた壁面や屋根の形状が、それらの事を助長しています。